

防止焦点はチームメイトによる影響を受けやすいか？

○長峯聖人 (筑波大学大学院)

外山美樹 (筑波大学)

キーワード：制御焦点, チームメイト, 動機づけ

問題と目的

Higgins (1997) の唱えた制御焦点理論では、個人の動機づけを促進焦点と防止焦点に大別しており、近年では各制御焦点の動機づけ・パフォーマンスに良い影響をもたらす具体的な他者の特徴について検討され始めている。

そのような中で、競争場面における他者からの影響に着目した研究として長峯他(2019)がある。長峯他 (2019) は具体的な他者としてライバルに着目し、促進焦点の個人がライバルによって良い影響(理想自己の顕在化, 鼓舞的動機づけの向上)を受けやすく、その結果、自身のパフォーマンスの向上につながることを明らかにした。長峯他 (2019) は考察で、防止焦点にとってはチームメイトが有益な他者となり得るという可能性を提示したが、未だ実証はされていない。

そこで本研究では、この可能性について実際に検討することとした。その際、防止焦点は個人よりも集団としての目標達成を重視する (Beersma et al., 2013) という指摘を踏まえ、最終的な目的変数として、チームへのコミットメントおよび集団的な動機づけを測定することとした。

方 法

分析対象者

体育系の部活・サークルに所属する大学生のうち、親密なチームメイトがいないと回答した者や適当に回答していると判断された者を除いた 172 名 (男性 118 名, 女性 53 名, 性別不明 1 名, 平均年齢 19.47 ± 1.00 歳) を分析対象とした。

使用尺度 (項目)

(a) PPFs 邦訳版 (尾崎・唐沢, 2011), (b) 競技経験および競技レベルに関する項目 (江田他, 2009), (c) 専門競技と所属団体の人数, (d) チームメイトの人数および特に親密なチームメイトの名前, (d) (c) のチームメイトがいることによる影響 (安心感の生起 (例: 気持ちが落ち着く), 義務自己の顕在化 (例: 自分のあるべき姿が浮かんでくる), 社会的つながりの認知 (例: 自分が周りから信頼されているという感覚を得られる)), (e) (c) のチームメイトがいることによるチームへのコミットメントの強化 (サークルコミットメント尺度 (橋本他, 2010) を一部改変) および集団的動機づけ (例: 試合に向けて, チームの皆で協力

して頑張りたい) の向上。

結果と考察

偏相関分析

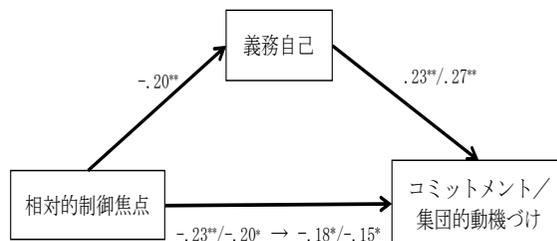
長峯他 (2019) と同様に, PPFs 邦訳版の得点を用いて相対的制御焦点の得点(値が高いと促進的, 低いと防止的)を算出し, 各尺度との偏相関係数を算出した (共変量は競技レベルと所属集団の人数)。その結果, 相対的制御焦点は義務自己, 規範コミットメント, および集団的動機づけと有意な負の相関がみられた (順に, $r_{rs} = -.20, -.26, -.20, ps < .05$) が, その他の変数とは有意な相関がみられなかった。

媒介分析

義務自己の顕在化が, 相対的制御焦点と規範コミットメントおよび集団的動機づけとの関連を媒介するか検討するため, ブートストラップ法 (標本数, 5000) による媒介分析を行った。

それぞれに対して, 義務自己の標準化間接効果に関する 95%ブートストラップ信頼区間を算出したところ, 規範コミットメント, 集団的動機づけともに信頼区間が 0 を含んでいなかった (順に, $B = -.038 [-.085, -.002], -.049 [-.100, -.008]$) ため, 間接効果が有意であった。

検討の結果, 防止焦点の個人はチームメイトがいることにより「あるべき自己の姿」が顕在化しやすく, それによってチームへのコミットメントや集団的な動機づけが高くなりやすいことが分かった。このことは競争場面において, 防止焦点の個人にはチームメイトの存在が有益であることを示唆しているといえる。



* $p < .05$, ** $p < .01$

注1) 数値は標準化係数

注2) 左側が規範コミットメント, 右側が集団的動機づけの値

Figure 1 制御焦点とチーム・コミットメントおよび集団的動機づけとの関連における義務自己の媒介効果